

談話における日本語とインドネシア語の「対者ほめ」

—「ほめ」の連鎖に着目して—

Mutia KUSUMAWATI

永 田 良 太

1. はじめに

「ほめ」はポジティブ・ポライトネスの一種であり (Brown & Levinson, 1987), 賞賛されたいという相手の欲求を満たす言語行動である。その一方で, ほめられた側にとって, 「ほめ」を受け入れると尊大な印象を与え, 拒絶すると相手の賞賛的態度を否定する恐れがあるなど, 「ほめ」は相手に負担をかける行為でもある (Holmes, 1988)。このように, 「ほめ」は「ほめる側」と「ほめられる側」の相互作用の中で成立している行為である。相互作用という観点から会話中の「ほめ」を見ると, 「ほめ」とその返答 (本連鎖) の前後にも関連する発話の連鎖が見られることが指摘されている (熊取谷, 1989; 金, 2007; 2012)。「ほめ」に関する従来の研究では, 「ほめ」とその返答という本連鎖の構成要素に着目されることが多かったが, 会話の中で「ほめ」がどのように行われているかを明らかにするためには, その前後にも着目しつつ, 「ほめ」を分析する必要がある。

また, 会話における「ほめ」には, それに対する返答を誘発するものだけでなく, 相手の発話途中や発話後に送られるあいづち的な「ほめ」もある。返答を誘発する「ほめ」がターン (発話権) の取得時に行われるのに対して, このような「ほめ」はターンを取らずに行われ, 聞き手としての言語行動というあいづちの機能や特徴を持つ。これら二つの側面から「ほめ」を捉えることで, 会話における「ほめ」の様相を包括的に明らかにすることができる。

さらに, 「ほめ」の展開パターンは言語によって異なることをふまえると (金, 2012), 他言語と対照することで, それぞれの特徴がより明らかになるとともに, その結果は異文化間コミュニケーションにおける人間関係の構築にも寄与するものとなるであろう。国際交流基金 (2019) によると, 2018年現在, インドネシア人日本語学習者数は中国に次いで多く⁽¹⁾, インドネシア人と日本人の接触機会も今後さらに増加することが予想される。加えて, 表現レベルでは日本語とインドネシア語の「ほめ」には相違点が見られることも指摘されている (大野, 2003; Kinanti, 2014)。このように, 文化的にも言語的にも異なる特徴を持つインドネシア語と比較することで, それぞれの特徴がより明らかになるとともに, 両言語話者による円滑な異文化間コミュニケーションの実現にも寄与できると考えられる。

2. 先行研究

2.1 日本語の「ほめ」に関する先行研究

日本語の「ほめ」に関しては、「ほめ」のストラテジー、機能、種類、連鎖の観点から明らかにされている。日本語で「ほめ」を行う際に最も多く使用されるストラテジーは「すごい」「かわいい」などプラスの意味を持つ表現による「評価」というストラテジーである(大野, 2003)。大野(2003)ではこのストラテジーはどのような対人関係においても最も多く見られると述べられている。その他に、「感情・意志表明」(例: 私も先生のような人間になれるよう頑張ります)、「事実指摘」(例: 分かりやすく教えてください)、「羨望表明」(例: いいなあ)、「質問」(例: その傘, どこで買われましたか)などがある。

「ほめ」は対人関係の構築・維持(Brown & Levinson, 1987; 古川, 2000)の他に、会話の開始や終結に関わる機能も持つ(小玉, 1996)。また、永田(2014)では、「ほめ」が会話の参加者相互のフェイスのバランスを保つとともに、話題展開の手がかりになると述べられている。

「ほめ」の種類に関しては、「対者ほめ」と「第三者ほめ」に分けられる(古川, 2002; 2003)。「対者ほめ」とはほめられる側自身あるいはほめられる側に関係のある事柄が「ほめ」の対象となるものである。一方、「第三者ほめ」とは、①ほめる側とほめられる側の両方に関わらないもの、②ほめる側とほめられる側の両方に関わるもの、③ほめる側に関わるもの、④一般の事柄が「ほめ」の対象となるものである。

「ほめ」それ自体に着目した研究に加えて、「ほめ」が行われる際には、その前後に「ほめ」に関わる会話参加者間の相互作用も見られることが指摘されている。「ほめ」に関わる会話参加者間の相互作用は「『ほめ』の連鎖」と呼ばれており(熊取谷, 1989; 金, 2007)、「先行連鎖」、「本連鎖」、「後続連鎖」に分けられる。また、言語によって連鎖のパターンや現れ方が異なることも指摘されている(金, 2012)。永田(2014)では、第三者に関わる話題における複数の「ほめ」について分析が行われているが、話し相手に関する話題における複数の「ほめ」(以下、「対者ほめ」)が談話の中でどのように展開されていくかについてはまだ明らかにされていない。「対者ほめ」は相手に関わるものであるため、それにどのように応じて談話を展開させていくのかは円滑なコミュニケーションの実現にとって重要であると考えられる。

2.2 インドネシア語の「ほめ」に関する先行研究

インドネシア語における「ほめ」の研究にはKinanti (2014), Purnama, Hamzah & Wahyuni (2017), Mandalasari & Hamzah (2018)などがあり、主にテレビ番組を分析資料として、「ほめ」の言語形式やストラテジーについて明らかにされている。Purnama, Hamzah & Wahyuni (2017)とMandalasari & Hamzah (2018)では「ほめ」の表現形式が「直接的」と「間接的」に分けられている。「直接的」な表現では「Kamu cantik sekali hari ini. (今日はとても綺麗ですね)」など形容詞が最も多く使用されている。「間接的」な表現では「Ingin bisa main piano seperti kamu. (あなたみたいにピアノを弾けるようになりたい)」など、ほめる側の感情を表す表現が用いられるという。

また、Kinanti (2014)によれば、インドネシア語でも、日本語と同様に「評価」、「質問」、「事実指摘」などが見られるが、日本語と異なり、対人関係によって使用されるストラテジーが異なり、同等関係では「冗談・からかい」(例: Cuih! Sebel! Bagus! Nggak bisa ngomong

apa-apa lagi. 【チッ、むかつく！かっこいい！言うことない。】), 上から下の関係では「評価」が最も多く使用される。さらに、日本語では見られない「神様への言及」(例: Masya Allah 【神様の恩寵をあなたに】) というストラテジーもインドネシア語では見られるという。その他に、「比較」(例: Kayaknya bisa ngalahin X. 【X<芸能人>も負けるよ】), 「メタファー」(例: Hatinya sungguh selembut salju 【雪のような柔らかい心を持つ】) や「感動詞のみ」(例: Wow) がインドネシア語の「ほめ」のストラテジーとして挙げられている。

2.3 先行研究に残された課題

「ほめ」に関する先行研究では、日本語においてもインドネシア語においても、「ほめ」それ自体に着目されることが多かった。日本語においては、それに加えて連鎖の観点からも研究が行われていることをふまえると、インドネシア語の「ほめ」に関しては、さらに分析対象を拡大して「ほめ」を捉える必要があるであろう。ただし、連鎖に関する日本語の先行研究においても、本連鎖の最初に見られる「ほめ-返答」しか分析されていないが、実際の談話では本連鎖に「ほめ」が複数現れる場合もある。このような「ほめ」のやり取りをどのように実現していくかは、会話の中で円滑な人間関係を構築していく上で重要であり、研究の必要性があると言えよう。

また、従来の研究では「ほめ手」がターンを取って行う「ほめ」が前提とされているが、「ほめ」はターンを取らずにあいづち的にも使用される。このような「ほめ」は「すごい」「いいな」「ほんとう？」などといった「評価的応答」(Clancy et al, 1996) の一部であり、その出現箇所はあいづちと一致している場合があるが、発話途中だけでなく発話後にも現れやすい (Goodwin, 1986)。これは「評価的応答」が「聞いている」「理解している」だけでなく、聞き手の姿勢や態度を表す機能も持つためである (今石, 1998)。このようなターンを取らずに行われる「ほめ」(「評価的応答」) がどのように用いられて談話が展開されていくかについてはまだ明らかにされていない。

以上をふまえ、本研究では以下の3つの研究課題を設ける。なお、会話は複数の話題で構成されるが、本研究においては、一つ的话题を維持・展開させていく「ほめ」の連鎖を扱うこととする。

- ① 日本語会話において同一の話題内に見られる「ほめ」の連鎖にはどのような特徴があるか。
- ② インドネシア語会話において同一の話題内に見られる「ほめ」の連鎖にはどのような特徴があるか。
- ③ 同一の話題内に見られる「ほめ」の連鎖に関して、日本語とインドネシア語にはどのような共通点と相違点があるか。

3. 分析資料と分析方法

3.1 分析資料

本研究のデータは日本語母語話者10組(女性5組, 男性5組)とインドネシア語母語話者10

組（女性5組，男性5組）の自由談話である。参加者はいずれも面識のない大学院生同士である。参加者には年齢が近い同性の相手と30分程度自由会話をしてもらった。会話はICレコーダーで録音され，それを文字化⁽²⁾したものを本研究の分析資料とする。

3.2 分析方法

本研究では談話における「対者ほめ」の連鎖に着目するため，主に話し相手の現状，所属，経験，性格，努力，考え，成果，持ち物に関する「ほめ」を分析対象とする。これにはターンを取得して行われる「ほめ」とターンを取得せずに行われる「ほめ」の両者が含まれる。「対者ほめ」は直接相手に関わるものであり，当該の「ほめ」に直接関わる言語的な反応あるいは「ほめ」の働きかけを受けて生起したと考えられる発話を，本研究では「ほめ」に対する「返答」とする。

「ほめ」の認定は大野（2003）とKinanti（2014）による「ほめ」のストラテジーに基づいて行われた。また，「返答」の分類は寺尾（1996），Faiza（2009）によるストラテジーに基づいて行われた。具体的には「肯定」（例：「はい，ありがとう」など「ほめ」に同意・肯定するもの），「否定」（例：「いいえ，そんな事ない」など直接「ほめ」を否定するもの）及び「回避」（例：「昨日買った」など「ほめ」に対する肯定か否定かをはっきり言わず，状況を説明したりするもの）である。これらの分類は日本語にもインドネシア語にも共通しているため，両言語を比較するのに適していると考えられる。

また，会話における話題の認定に際して，本研究では筒井（2012）にもとづいて行われた。筒井（2012）では話題内容の関係に着目し，以下のような区分が行われている。

- ① それまで話題となっていた対象とは異なる，新しい対象や事態への言及
- ② すでに言及された対象や事態の異なる側面への言及
- ③ すでに言及された対象や事態の異なる時間における様相への言及
- ④ すでに言及された対象や事態について，それと同種の対象や事態への言及
- ⑤ すでに言及された個別の対象や事態の一般化

なお，本研究では1～2発話程度で現話題から逸れているように見える発話は，永野（1959：78）で述べられているように，同じ話題における展開や補足とした。

「ほめ－返答」と話題の認定の信頼性を確認するために，データの20%を筆者とそれぞれの母語話者である第二認定者とで認定を行い，その一致率をカッパ係数で計った。それぞれの一致率は0.90以上を達成していたため，信頼性が保証されたと言える。

分析の手順について，まず，「ほめ」が複数現れる話題のみを取り上げ，その中に現れる「ほめ」がターンを取って行われているかターンを取らずに行われているかを杉戸（1989）にもとづいて区分した。杉戸（1989）では発話が「実質的な発話」と「あいづち的発話」に分けられている。「実質的な発話」とは何らかの実質的内容を表す言語形式を含んで，判断，説明，質問，回答等，事実の叙述や聞き手への働きかけをする発話である。一方，「あいづち的発話」とは，話し手が実質的な発話をしている間，またはその発話を終了した直後に，発話に対する反応として聞き手から送られる短い表現である。このような区別に従って，本研究でも「ほめ」を区

分した。その上で、「ほめ」が複数見られる際の連鎖のパターンおよび両言語における特徴を明らかにする。

4. 分析結果

4.1 「ほめ」の連鎖パターン

本研究の分析資料に見られた話題の総数は日本語会話で 528、インドネシア語会話で 388 であった。そのうち、本研究で対象とする「対者ほめ」を含む話題は日本語会話で 38 (7.2%)、インドネシア語会話で 16 (4.1%) であった。

性差に関して、女性同士の日本語会話で「対者ほめ」を含む話題は 15 (48.4%)、男性同士の日本語会話で「対者ほめ」を含む話題は 16 (51.6%) であった。一方、女性同士のインドネシア語会話で「対者ほめ」を含む話題は 3 (23.1%)、男性同士のインドネシア語会話で「対者ほめ」を含む話題は 10 (76.9%) であった。ここから、会話中で「対者ほめ」を含む話題の数に性差が関わるのはインドネシア語の特徴であることが示唆される。以下においては一つの話題に複数の「対者ほめ」が見られる際のパターンについて分析を行うが、特にインドネシア語においては性差にも留意しながら分析を行う。

話題中に見られる複数の「対者ほめ」をターン取得の有無によってまとめたものが表 1 である。

表 1 ターン取得の有無による「対者ほめ」のパターン

パターン		日本語		インドネシア語	
		回数	割合	回数	割合
ターンを取る	「ほめー返答」の繰り返し	21	67.7%	11	84.6%
	「ほめ」の連続	1	3.2%	1	7.7%
	「ほめ」の交替	2	6.5%	0	0%
ターンを取らない		7	22.6%	1	7.7%
合計		31	100%	13	100%

話題中に生起する複数の「対者ほめ」には、ターンを取って行われる場合とターンを取らずに行われる場合がある。ターンを取って行われる場合には「ほめー返答」が一つの話題の中で繰り返されるものと特定の話者によって「ほめ」が繰り返し行われるもの（「ほめ」の連続）および話者間で相互に「ほめ」が行われるもの（「ほめ」の交替）が見られた。なお、ターンを取得して行われる「ほめ」と取得せずに行われる「ほめ」の両方によって構成されるパターンも日本語会話で 7 例、インドネシア語会話で 3 例見られたが、これらに関しては稿を改めて考察することとしたい。

表 1 を見ると、日本語とインドネシア語には共通点と相違点が見られることがわかる。両者は「ほめー返答」の繰り返しというパターンが最も多いという点で類似しているが、ターンを

取らない「ほめ」に関しては異なり、日本語では7例(22.6%)見られるのに対して、インドネシア語では1例(7.7%)のみである。以下においては共通点と相違点に着目しながら、具体的に見ていく。

4.2 ターンを取って行われる「ほめ」

まず、日本語とインドネシア語の両方に最も多く見られた「ほめ-返答」の繰り返しは、一つの話題中で「ほめ-返答」が2回以上繰り返されるものである。以下の例(1)のように、「ほめ-返答」が連続的に繰り返される場合もあるが、例(2)のように「ほめ-返答」というペアとペアの間に発話が挿入される場合もある。特に、日本語においてはこのパターンが顕著に多く見られた(日本語61.9%、インドネシア語27.3%)。なお、以下の例においては「ほめ」を太字、それに対する「返答」を斜体でそれぞれ表す。

談話例(1) インドネシア語母語話者・女性同士

番号	発話者	発話内容	連鎖
1	IF02	Tapi, Mbak udah dosen di X <nama univ>? でも、あなたはもうX<大学名>の講師になったでしょうね?	先行連鎖
2	IF01	Nggak sih aku masih belum.. いや、私はまだ、	
3	IF02	Tapi, pasti lah ditarik. でも、きっとスカウトされるでしょう。	ほめ
4	IF01	Nggak tau juga. Karena.. <i>まだ分からないね。だって、</i>	返答
5	IF02	Insya Allah, Mbak. [神様が許可するなら] きっとそうですよ。	ほめ
6	IF01	Amin. Amin. Karena kemarin kan ada.. <i>[アーメン] あなたの祈りが叶いますように。なんかこの前、</i>	返答
7	IF02	Ilmunya sudah luar biasa loh. 知識がもう半端ないんじゃないですか。	ほめ
8	IF01	Ck. Aduh. Aku kayak masih sama dosen aja "Aduh kamu nulis apa ini?" <i>いや、どうかな。この間だって、「これ、何書いているの?」って先生に言われたんですよ。</i>	返答
9	IF02	Eh, tapi, tahun, udah tahun keberapa mbak di sini? え、でも、何年、ここではもう何年目ですか?	話題転換

談話例 (2) 日本語語母語話者・男性同士

番号	発話者	発話内容	連鎖
1	JM05	え、それ、と、え、結局、どこ行ったんですか？	先行連鎖
2	JM06	僕は、あの、高速道路の会社で、(JM05: あー、そうなんすね)特に〇〇<地域名>だけの高速道路、都市(JM05: へー)高速の道路を作るって会社で。	
3	JM05	それやったら海外とか行けるんですか？	
4	JM06	と、一応、これ、もう、こ、これから国内の需要ってのはなく(JM05: うん)なるから、(JM05: そうですよ)海外に伸ばしていこう、みたいなのが今の流れだから。	
5	JM05	行けると見て。	
6	JM06	ある程度、10年、15年、日本で経験積んでから、海外に行けたらいいなーっていうのは、(JM05: へー、あ、そうなんすか)ODAか何かで行ったらいいなとかあって。	
7	JM05	<u>あ、いいっすね。高速道路か。</u>	ほめ
8	JM06	<u>ま、つぶれないし、絶対つぶれんしと思って。</u>	返答
9	JM05	<u>絶対つぶれないっすね。絶対つぶれんし、しかも、今からより自動車あれじゃないですか。</u>	ほめ
10	JM06	<u>うーん、自動運転とか。</u>	返答
11	JM05	や、自動運転な(JM06: うーん)ったときに、めっちゃ変わるじゃないっすか。	挿入発話
12	JM06	うーん。	
13	JM05	<u>いいっすね、なんか、そっちの道とか。</u>	ほめ
14	JM06	<u>あと、取りあえず安定を、</u>	返答
15	JM05	<u>確かに、あ、いいわー。</u>	ほめ
16	JM06	求めて。	
17	JM05	そうっすよね。それか、就活するとき(JM06: うん)って、あれでした？専門どっちって言ってたんですか？	話題転換

このような「ほめ-返答」の繰り返しが見られる場合には、例(1)や例(2)のように、後続連鎖が見られず次の話題に移行することが多い。特にインドネシア語にそのような特徴が見られた(日本語 67.7%, インドネシア語 84.6%)。

ただし、「ほめ-返答」の繰り返しに関して、日本語とインドネシア語には相違点もある。「ほめ-返答」が繰り返される回数を見ると、インドネシア語では2回までの繰り返し(54.6%)が多いのに対して、日本語では2回以上の繰り返しが多い(52.4%)という違いがある。繰り返しの回数に関して、インドネシア語では最も多いもので3回であったが、日本語では一つの話題

の中で「ほめ－返答」の繰り返しは5回現れる例も観察された。

また、性差に関しても相違点が見られる。「ほめ－返答」の繰り返しを性差に着目して見ると、日本語では女性同士の談話例は12 (57.1%)、男性同士の談話例は9 (42.9%) である。それに対して、インドネシア語では女性同士の談話例は2 (18.2%)、男性同士の談話例は9 (81.8%) であり、男性同士の場合に顕著に多く見られる。

次に、「ほめ」の交替は、一つの話題の中で会話の参加者がお互いに相手をほめるものである。例えば、例(3)では、発話6でJF05がJF06の苗字をほめているが、発話7では逆にJF06がJF05の苗字をほめている。その後、挿入発話が行われ、発話10では自分の苗字について否定的な意見を述べつつ、再び相手の苗字をほめている。永田(2014)では、このような「対者ほめ」による「ほめ」の交替は2つの話題にまたがって行われることが指摘されているが、一つの話題の中でも行われていることが分かる。

談話例(3) 日本語語母語話者・女性同士

番号	発話者	発話内容	連鎖
1	JF06	えっと、JF06 って読むんですよ。	先行連鎖
2	JF05	えっと、初めて出会いました。	
3	JF06	そう。〇〇っていう字(JF05: はい, あの)を, 佐藤の藤を (JF05: はい) 〇〇って読むじゃないですか。	
4	JF05	〇〇, え?	
5	JF06	X X <芸能人>とか, (JF05: あー)あれと同じで, (JF05: あー)〇〇って読んで, (JF05: はい)とう, みた, 佐藤・加藤の藤と同じ, (JF05: あー)ふじ, ふじで。	
6	JF05	<u>かっこいい, うーん。(JF06: うん) 私, 名前が JF05 なんです, その, 珍しい苗字 (JF06: あー) に憧れているんです。</u>	ほめ
7	JF06	<u>私, 逆に, 読みやすくて一番最後のほうの苗字に憧れますよ。</u> 読みづらいし, (JF05: あー)あと, 前のほうだから, 毎年, 春とか, 小中学校とか絶対当てられるやつだったりとか。	ほめ
8	JF05	あ, そういうのあるんですか?	挿入発話
9	JF06	うん。	
10	JF05	<u>逆に, 私, 遅すぎて, あの, 〇〇とかいろいろあっても前のほうがいいなと思ってました。</u> (JF06: あー)もう何, 健康診断, 全部遅くて。	ほめ
11	JF06	あ, それはちょっと面倒くさいかもしれないですね, 確かに。	後続連鎖
12		社会学系で何の勉強されてるんですか?	話題転換

このような「ほめ」の交替は日本語の会話で2例見られたが、インドネシア語では1例も見

られなかったことをふまえると、日本語の会話の特徴である可能性がある。この点については、今後さらにデータを追加して、慎重に検討する必要がある。

4.3 ターンを取らずに行われる「ほめ」

これまではターンを取って行われる「ほめ」について見てきたが、以下の例(4)や例(5)のように、話題が展開される中では、ターンを取らずに行われる「ほめ」が複数回生起することがある。これらの「ほめ」は相手の発話が終了したポーズ時(例(4))や発話途中(例(5))に見られる。

談話例(4) 日本語母語話者・男性同士

番号	発話者	発話内容	連鎖
1	JM05	全員かどうか分かんないんですけど、でも、移動するときはお付きの運転手がないと無理らしくって。(JM06: えー)たぶん、バスとか乗っていいんですけど、車もう絶対駄目なんですよ。で、場所、(JM06: へー)なん、へき地にあった場合は、もう全部その人に任せる、みたいな。(JM06: へー)ヤバいっすよね。	先行連鎖
2	JM06	現地のマネジャーみたいな。	
3	JM05	マネジャーみたいのがいて、やってくれるらしいっす。	
4	JM06	<u>すっごい。</u>	ほめ
5	JM05	で、掃除と風呂と。な、掃除と洗濯とかも、なんか、全部やってもらうみたい。(JM06: へー)ヤバいっすよ。	
6	JM06	<u>ちょっとセレブ感。</u>	ほめ
7	JM05	だけど、場所が砂漠やったりするから。(JM06: 確かに)しかも何もできん、っていう。	

談話例(5) インドネシア語母語話者・女性同士

番号	発話者	発話内容	連鎖
1	IF03	Emang ngurus-ngurus gitu, visa dan lain lainnya? ビザとかの手続きしたんですか?	先行連鎖
2	IF04	Sebenarnya aku tuh sebelum ke sini tinggalnya di XX. (IF03: Ooh) 9 bulan. 実は、ここに来る前にXX<海外の地域名>に住んだことがありますよ。(IF03: えー) 9か月。	
3	IF03	Jadi emang udah di XX ya. XXに住んだことがあるんですね。	

4	IF04	<p>Udah di XX, jadi aku, em, sekolah sambil kerja (IF03: sambil cari-cari). Hm mm, sambil nyari-nyari sekolah juga (IF03: <u>Wah, Super</u>). Kalo di sini kan aksesnya lebih, (IF03: <u>Super banget, super banget</u>) enggak enggak..</p> <p>XXに住んだことがあって、私は、えーと、バイトしながら学校に通って (IF03:探しながら)。そう、大学を探しながら (IF03: <u>うわーすごい</u>)。結局、このほうがアクセスがもっとう、 (IF03: <u>とてもすごい, とてもすごい</u>) なんていうかね、</p>	ほめ
---	------	--	----

例 (4) では、JM05 の発話 3 に対して JM06 は「すごい」(発話 4) と評価的応答としての「ほめ」を行っている。続く JM05 の発話 5 に対しても、再び「ちょっとセレブ感」(発話 6) といった「ほめ」が行われている。また、例 (5) では、IF04 による発話 4 の発話途中に IF03 が評価的応答としての「ほめ」を重ねて行っている。

このようなターンを取らずに行われる「ほめ」に対しては、それに対する返答が行われていない。例 (4) では、発話 4 と発話 6 のいずれの「ほめ」に対しても JM05 は返答せず、進行中の話題を継続している。例 (5) においても同様である。このように、話し手の発話を妨げず、ターンを取らない「聞き手」としての立場から複数の「ほめ」を行うことが日本語にもインドネシア語にも見られる。これらの結果は Gardner (1996;2001), Goodwin (1986) や Clancy et al (1996) と同様である。

ただし、上の表 1 で見たように、ターンを取らずに行われる「ほめ」の出現率に関しては、日本語とインドネシア語の間に違いが見られる。日本語ではこのような「ほめ」の割合は全体の 22.6% であり、「ほめ」が複数回見られるパターンの中で 2 番目に多いのに対して、インドネシア語では 7.7% であり、日本語の 3 分の 1 の割合である。

本節ではターンの取得の有無という観点から、同一の話題の中で複数回見られる「ほめ」を分析してきた。その結果、日本語とインドネシア語には共通点と相違点があることが明らかになった。上記の分析結果をふまえて、以下においては、そのような特徴が見られる要因と異文化間コミュニケーション上の留意点について考察を行う。

5. 考察

ターンを取って行われる「ほめ」では、両言語ともに「ほめ-返答」の繰り返しというパターンが最も多く見られる。ターンを取って行われる「ほめ」は、相手を肯定的に評価するというほめる側の意図が明示的であるため、それに対して「返答」をすることが重視されると考えられる。

両言語ともに、「ほめ-返答」の繰り返しのパターンではほとんど後続連鎖がなく、話題を「ほめ」で終結させる展開が見られるが、このような機能はインタビュー談話にも見られることが小玉 (1996) において指摘されている。本研究で分析した初対面の談話も、相手に関する情報が少なく、相手の情報を得るために、話題の開始として「質問」が多く使用されていた。すべ

ての話題開始発話のうち、日本語では 53.6%、インドネシア語では 75%が質問であり、談話の構成がインタビューに似ている。このようなタイプの談話では、相手から提供された情報に対して「ほめ」が行われ、それに「返答」が行われることで当該の話題が完結することになる。

ただし、「ほめ－返答」の繰り返しに関して、日本語とインドネシア語には違いも見られ、「ほめ－返答」が一つの話題の中で繰り返される回数は日本語の方が多い。この点に関して、具体的にどのような「返答」がなされていたのかを見ると、日本語では「肯定のみ」(47.6%)や「肯定－回避」(19.0%)といった「肯定」を含む返答が多くなされていたのに対して、インドネシア語では「回避のみ」(36.4%)や「否定－回避」(27.3%)が多いという違いが見られる。このように日本語では「ほめ」を受け入れる肯定型の返答スタイルが多く見られたことから、「ほめ－返答」が一つの話題の中で何度も繰り返されて会話が展開していくことになったものと考えられる。

次に、ターンを取らずに行われる「ほめ」に関して、両言語ともに、「ほめ」に対する返答がほとんど見られないという点で共通している。ただし、談話の中でターンを取らずに行われる「ほめ」が見られる頻度には違いがあり、インドネシア語では日本語の 3 分の 1 ほどしか見られなかった。先に述べたように、日本語では「ほめ」に対して肯定型の返答が多いのに対してインドネシア語では回避や否定型の返答が多い。ターンを取らずに行われる「ほめ」では、相手が発話途中であり、それを否定することが難しいために、そのような「ほめ」が日本語よりも見られにくいと考えられる。

最後に、本研究の結果をふまえて、日本語母語話者とインドネシア語母語話者による異文化間コミュニケーションについて考えてみたい。Herbert (1989) によれば、アメリカ・ニュージールランド英語では「ほめ」は連帯感の構築に関わっており、ほめられる側が相手からの「ほめ」を受け入れることで相互の連帯感が構築されるという。このような「ほめ」による連帯感の構築は異文化間コミュニケーションの場面でも重要であるが、その際には、本研究で明らかになったような日本語とインドネシア語の違いに留意する必要がある。

具体的には、「ほめ－返答」が一つの話題内で繰り返される回数やターンを取らずに行われるあいづち的な「ほめ」の頻度はいずれも日本語の方が高かった。ここから、インドネシア語母語話者は日本語母語話者の「ほめ」が大げさだという印象を受ける可能性がある。逆に、日本語母語話者にとっては、インドネシア語母語話者の「ほめ」が消極的で当該の話題に興味がないという印象を与える可能性がある。また、一つの話題の中で会話者が相互にほめ合う「ほめ」の交替も日本語にのみ見られたが、そのような談話の展開の実現もインドネシア語母語話者との間では難しくなることが予想される。さらに、性差に関しても、インドネシア語では女性同士はあまり複数の「ほめ」を行わない傾向にあるため、コミュニケーションをする際には、相手の性別にも配慮する必要がある。

これから増加することが予想される日本語母語話者とインドネシア語母語話者の接触場面では、本研究で明らかになったような日本語とインドネシア語の違いを理解した上でのコミュニケーションが求められるであろう。

6. おわりに

本研究では話題が展開される中で複数回見られる「対者ほめ」について、ターン取得の有無の観点から分析を行った。その結果、日本語とインドネシア語の談話における「対者ほめ」には共通点と相違点が見られることが明らかになった。今回は人間関係の構築が重視される初対面の関係における「ほめ」について分析を行ったが、関係性によって「ほめ」の用いられ方は異なる可能性がある。例えば、親しい関係の会話では、人間関係の構築よりも人間関係の確認や維持に重点が置かれるであろう。このように様々な関係性における「ほめ」の用いられ方をさらに追究する必要がある。

また、本研究ではお互いに直接関わる「対者ほめ」を分析対象としたが、お互いに関わらない「第三者ほめ」がどのように連鎖の中で展開されているのかを見ることで、さらに包括的に日本語とインドネシアの「ほめ」を捉えることができるであろう。いずれも今後の課題としたい。

【注】

- (1) 2018年現在、中国人日本語学習者数は1,004,625人であり、インドネシア人日本語学習者数はそれに次ぐ706,603人である。
- (2) 文字化記号：

日本語	インドネシア語	意味
？	？	疑問発話終了
。	.	疑問発話以外の発話終了
，，	..	終了せずに中断された発話
(発話者：)	(発話者：)	重なっているあいづち的発話
太字・下線	太字・下線	ほめ
斜体・下線	斜体・下線	ほめに対する返答

参考文献

- 今石幸子 (1993) 「聞き手の行動：あいづちの規定条件」『阪大日本語研究』(5), pp. 95-109, 大阪大学文学部日本学科 (言語系)
- 大野敬代 (2003) 「人間関係からみた「ほめ」とその工夫について—シナリオにおける「働きかけ表現として—」『早稲田大学 大学院教育学研究科紀要』別冊 (10), pp. 337-346, 早稲田大学大学院教育学研究科
- 金庚芥 (2007) 「日本語と韓国語の「ほめの談話」」『社会言語科学』(10) 1, pp. 18-32, 社会言

語科学会

- 金庚芥 (2012) 『日本語と韓国語の「ほめ」に関する対照研究』 ひつじ書房
- 熊取谷哲夫 (1989) 「日本語における誉めの表現形式と談話構造」『言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究』 (2), pp. 97-108, 広島大学教育学部
- 国際交流基金 (2019) 「2018 年度海外日本語教育機関調査結果」 <<https://www.jpj.go.jp/j/about/press/2019/dl/2019-029-02.pdf>> (2020. 11. 07 時点)
- 小玉安恵 (1996) 「対談インタビューにおけるほめの機能 (1) 一会話者の役割とほめの談話における位置という観点から」『日本語学』 (15) 5, pp. 59-67, 明治書院
- 杉戸清樹 (1989) 「ことばのあいづちと身振りのあいづちー談話行動における非言語的表現ー」『日本語教育』 (76), pp. 48-59, 日本語教育学会
- 筒井佐代 (2012) 『談話の構造分析』 くろしお出版
- 寺尾留美 (1996) 「ほめ言葉への返答スタイル」『日本語学』 (5), pp. 81-88, 明治書院
- 永田良太 (2014) 「談話のトピック展開から見た「ほめ」」『表現研究』 (99), pp. 30-39, 表現学会
- 永野賢 (1959) 『学校文法：文章論』 朝倉書店
- 古川由理子 (2000) 「『ほめ』の条件に関する一考察」『日本語・日本文化研究』 (10), pp. 117-130, 大阪外国語大学日本語講座
- 古川由理子 (2002) 「『ほめ』の種類ー受け手に直接関係しない『ほめ』を中心に」『日本語・日本文化研究』 (12), pp. 41-54, 大阪外国語大学日本語講座
- 古川由理子 (2003) 「書き言葉データにおける<対者ほめ>の特徴ー対人関係から見た「ほめ」の分析」『日本語教育』 (117), pp. 33-42, 日本語教育学会
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: some universals in language usage*. Mouton Publishers.
- Clancy, P. M., Thompson, S. A., Suzuki, R., Tao, H. (1996). The conversational use of reactive tokens in English, Japanese, and Mandarin. *Journal of Pragmatics*, 26, 355-387.
- Faiza, Ema. (2009). Respon Penutur Bahasa Indonesia terhadap Pujian (Sebuah Kajian Pragmatik). *MOZAIK: Jurnal Ilmu Humaniora*, 6 (2), 99-109.
- Gardner, Rod. (1996). Between Speaking and Listening: The Vocalisation of Understandings. *Applied Linguistics*, 19 (2), 204-224.
- Gardner, Rod. (2001). *When listeners talk*. Benjamins, Amsterdam.
- Goodwin, Charles. (1986). Between and within: Alternative sequential treatments of continuers and assessments. *Human Studies*, 9, 205-217.
- Herbert, Robert K. (1989). The ethnography of English compliments and compliment responses: A contrastive sketch. *Contrastive pragmatics*, 3-35.
- Holmes, Janet. (1988). Paying compliments: a sex-preferential politeness strategy. *Journal of Pragmatics*, 12, 445-465.

- Kinanti, Puput K. (2014). *Memuji dan Merespon Pujian dalam Bahasa Indonesia (Studi Kasus di Lingkungan Mahasiswa dan Acara Hiburan Televisi)*, 修士論文, Universitas Gajah Mada.
- Mandalasari, M. & Hamzah. (2018). Compliment Strategy and Topics Based on Gender Difference by Indonesian Idol Judges 2018. *E-Journal of English Language & Literature*, 7 (4), 390-395.
- Purnama, D. S., Hamzah, & Wahyuni, D. (2017). The Use of Compliments by Male and Female Judges Found in Gala Show X-Factor Indonesia (season 1) 2013. *E-Journal of English Language & Literature*, 6 (2) Serie A, 37-43.